

# その他

## サラワツカ収容所

### 二年余苦難の強制労働

石川県 前川 武雄

私が召集を受けたのは、昭和十九年のいわゆる根こそぎ動員の時でした。四十近い私によもやの召集、半ば覚悟はしていても、妻子を残しての千島択捉島勤務は厳しいものでした。勤務にようやく馴れ、北国の夏も終わろうというときに、晴天の霹靂の終戦でした。敗戦の経験の無い日本国陸軍の一兵卒たる私は、心の片隅に安堵の気持ちが無かったといえば嘘となるが、それ以上に我々の今後はいかになるか、故郷に残した

妻子は、と不安にかられる毎日でありました。

猪俣隊長から復員を知らされ、島の天寧港から乗船、ようやく故郷に帰れると喜びに満ちた我々は、ソ連の裏切り、国際法無視の悪逆非道のシベリヤ強制労働という地獄へ陥らされて、次のような苦難の二カ年間の末、奇跡の生還をすることができました。平成七年は終戦五十年、思えば「よくぞ生き残れた」と膚に粟を生じる今日であります。

#### 〔私の強制労働〕

労働は、私たちの入った収容所では、二百人隊を二班に分けて行われました。私は汽車の燃料にする薪づくり方に回された。もう一班は、鉄道線路の高(かさ)上げ工事でした。

私たちは線路の付近に倒れている松材を、八〇センチ

チほどの長さに切り、太いものは割ってそれを線路の傍らに、高さ一メートル半ほど積み上げていきました。初めは線路沿いに長さ約六メートル積みあげたが、そのうちにノルマの量がふくれあがり、六メートルが八メートルとなり、十メートルとなり、やがて毎日十二メートル積みと強要されるようになりました。

しかし、このノルマもいやいやながらも達成に励んだため、次第に体力は消耗するし、精神的にもいらいりました。ノルマを達成しないと食事の量が減らされるのでした。毎日の食事の量が少なくて弱っていたのに、さらに減らされては腹の皮が背中にくっつくような空腹になって、とつても耐えられるものではありません。

薪となる用材も、初めは線路付近に多数あったが、日が経つにつれてなくなり、今度は林の中に入って枯れた立木を切ることになつたのです。

ひよろひよろと林の中を彷徨する戦友の後姿を見ると、気の毒でならなかった。私の老衰した姿を戦友が、どのように見ているだろうかと思ふと情けなかった。

十月初旬になると、道は固く氷結して油断するとひっくりかえつたが、これから真冬目がけてどんなに寒くなるかと思ふと、また不安がこみあげてきました。帰国の希望が全然もてなかった私は、我が身ながら哀れでならなかったのです。

この作業も栄養不足の私たちにとっては楽なものではないソ連の樵用の鋸は両方に握りがあつて、二人で向かい合つて引くようになっていたが、二人の呼吸が合わない、能率が上がりません。こんなときは監視のソ連兵が鞭で叩いたり、大声でわめき散らしたりして、私たちを散々に苦しめました。

戦友の一人が、片膝を冷たい地面にいつもつけて鋸を引いていたので、遂に関節を痛めて随分苦勞していましたが、そんな戦友に対してもソ連兵は容赦しませんでした。

一方、線路の嵩上げ作業も、樹木の伐採以上に辛いものです。平地に枕木を並べてその上にレールを置いたような簡単な線路を、路盤を高くした上に拡張し、本格的な鉄道線路に仕上げる作業ですから、なかなか

の重労働でした。路盤の構築には最も労力を要し、レ  
ベルなどの測量機械がほとんどなかったから、すべて  
私たちの人力によらなければなりません。

鉄道を新設する場合は、路盤を仕上げ、次に枕木を  
一定間隔に並べ、その上にレールを敷き、ゲージを当  
てて犬釘を打ち込み、バラスを敷く作業であった。こ  
れも毎日のノルマが厳しく、それを達成しないと減食  
になることは言うまでもありません。

#### 〔重労働に対する収容所での食料〕

食事は朝食は黒パン一片（基準は一人三百五十グラ  
ムだったが実際はウンと少なかった）、昼食と夕食は、  
初めのころは玄米の粥だったが、玄米がなくなると、  
いろいろな雑穀の粥が出され、特に高粱（コーリヤン）  
が多かったです。

これも原穀の皮のついたもので、満足できる量は到  
底支給されず、粥のひとしずくも残さず胃袋に収めて  
も、慢性化した空腹感は、最後まで満たされることは  
ありませんでした。

幸いシベリアの土になることも、また凍傷にかかる

こともなく、今日まで健康でおられたことを考えると、  
誠に不思議に思われてなりません。私は自分だけの力  
でこの苦難に耐え凌ぐことができたのではない、神仏  
の御加護があればこそと、感謝せずにはおられません  
でした。

今になって思うと、昭和二十一年及び二十二年はソ  
連でも非常な食糧難であったことが影響したのではな  
いでしょうか。次に食料の内容について書きます。

1、玄米⇨千島から船で運んできたもので、粥を通  
り越して重湯に近いものでした。水をうんと加えて、ド  
ロドロに炊き上げたもので、これを飯盒に三分の一し  
かもらえない。穀物の品種が変わっても同じほどの量  
でした。

2、黒パン⇨ライ麦の粉に皮まで混ぜたままパンに  
したもので、初めはとて食べられなかった。しかし、  
空腹の日々が続くと、うまいうまいと食べるようにな  
りました。皮の部分が消化しなかったためか、食べた  
黒パンの量に近い大便が出たようで、不思議に思っ  
ていました。

3、高粱（コーリヤン） 皮をつけたまま粥にしての支給でした。これも当初は食べられなかったのです。空腹感がひどくなるにつれ、食べられるようになりました。皮でかさをあげていたのか、これも未消化部分が多かったようで、抑留期間中、最も長く食べさせられたものです。

4、豆類 〓これも粥状に煮たもので、少ないときは、一食分に豆が四十三粒しかなかったことを覚えていいます。お湯の中に豆が混入しているようなものでした。

5、粉（もみ） 〓朝鮮から持ってきたといわれたもので、そのままでは食べられないので、収容所内で臼（うす）と杵（きね）を作って、粉殻を取り、さらに精白して粥にしました。それは夜間作業で精白されたので、私も数回この作業を志願したことを覚えていいます。

6、大豆粉 〓これは米国からきたものといわれていた。この粥を食べるとひんぱんに下痢をしました。消化しきれないのか、私にはいやな食物でした。こんなときは下痢を止めるために、炊事場から消炭をもらっ

てきて粉にして飲んでいました。

7、燕麦（えんばく） 〓これも皮のついたまま煮て食べさせられました。これは口の中でかんで皮を吐き出し、わずかに残った汁のようなものをのどに入れた。とても食事と言えるものではなく、人間としての扱いではありませんでした。

8、粟（あわ） 〓原穀のまま煮たもので、これを食べた翌日は、大半の者は糞詰まりになり、便所の中で戦友同士お互いに指で肛門からほじくり出して、やっと排便した。ひどいものを食わせたと、皆喧しかったが、当時としては、そんなものでも食べないと、生きていけませんでした。

9、大麦 〓これだけは粥にするとねばりが出て、やっと人間らしい食事となった。しかし、食べた日数は少なかった。

10、ジャガ芋 〓病気で入院中に薄く切ったのが汁の中に浮いていたが、収容所では、ほとんどお目にかかりません。

11、副食品 〓昭和二十年の暮ころ、主食の粥の他に、

塩漬けの生鰯が一人に一匹づつ支給されたことがあった。日ごろの空腹に苦しんでいた私たちにとっては、とても珍味でした。頭から尾まではもちろん、骨や内臓まで残すところなく食べた。栄養になる食事を、ほとんどしていなかっただけに、内臓が最もおいしかったです。しかし、この副食も、わずかの間食べただけで、それ以外の「おかず」はほとんど支給されませんでした。

その当時、食事は私たちにとっては、最大の楽しみであり、かつ体力維持の根源をなすものであった。しかしながら、屋外の厳しい寒さと、カロリー不足によって、<sup>てきめん</sup>靦面に体力が低下しました。空腹が日増しにひどくなると、精神的にも落ち込み、最後には生きることがいやになってきた。毎日毎日、腹がへってどうにもならないという苦悩の生活は、今思い出してもぞっとする体験でした。

粗末な夕食を終えて、ベツトに横になると猛然と空腹感が体の中を突き上げてきた。これは少しばかり食べたことよって胃を刺激し、さらに食欲が出てくる

ということらしいです。

この飢餓状態の苦しきは、どんな重病の苦しきにも劣らないひどいもので、地獄をさまよう餓鬼そのものでした。

そんなとき、私たちはペチカの周りに集まって、食物の話で苦しみをまぎらわせました。当時同じ収容所にいた仲間、北海道、東北、北信越出身者ばかりで、お互いの郷土の名物に話の花を咲かせた。そして時間のたつのを待つ以外仕方がなかった。おいしい食物の話になると、口の中に唾がたまった。それをグツと飲み込み、お互いが顔を見合わせてスターリンを恨んだものです。

朝、眼が覚めた時から晩寝るまで、片時も空腹のつらさを忘れることはありませんでした。このため、路上に落ちているものはすべて食べ物に見え、馬糞があたかもジャガ芋に見えた。カンカンに凍っているのを拾ってきて、ペチカの上に載せると、やがて氷が溶けて馬糞であることがわかり、がっかりした。こんなことを度々繰り返していました。

雪が溶ける五月ころから、雪の降る十月初めにかけて、野草では葉はもちろん、根まで掘って飯盒で煮て食べた。食べられそうな雑草は手当たり次第に食べたが、中には毒草と知らずに手を出した兵士もいたようです。特に猛毒の「トリカブト」の根を食べて四人の兵士は苦しみながら死んでいった。戦場の砲煙弾雨の中でなく、自らの飢餓を少しでもやわらげようと、血走った目で見付けた草が死を招く「毒草」だったとは……哀れでなりません。

このことがあってから「草をみだりに食うな」という注意が収容所を管理するソ連側から通告されたが、「ろくに食べ物をくれずに何いつてるんだ……」と、雑草探しは止められなかった。所詮は空腹をしばしやわらげてくれるだけのほかないものだったが、ただ一つ「タンポポ」のような草の根が、あたかも牛蒡（ごぼう）のような味がして、とても食べやすかったことを今でも覚えていています。

そこいら中を探して食べるのは雑草だけではなかった。蛙、蛇、鼠など、見つかったものはすべて食べた。

しかし、蛇の内臓を飯盒の蓋で煮て、汁のようにとけたものをうまそうに飲む兵士や、蛙の腹の中にある黒い卵を煮て食べる者もいた。私は腹がへって、へってどうにもならない時でも、この二つだけはどうしても食べる気がしませんでした。

そのころの私たちを、今の人たちが見たら、驚きあきれ果てるに違いない。ただ生き延びるがために少しでも腹を満たしておこうと、そのことだけに精神を集中させていた。まさに餓鬼道に落ちた亡者のようでした。

食べたい、食べたいと地獄絵に出てくる亡者だった。そしてこんなひどい目にあわすスターリンを閻魔（えんま）大王の生まれかわりだと思いました。

下士官と二人で、落葉松の林に入って、大木を伐り倒しに行ったことがあった。原始林の中の落葉松は二〇メートル以上の高さがあった、幹の上部まで枝がない直径三〇センチ以上もある大木を、半日で十本以上も伐り倒したが、見れば見るほど見事で、先端の枝の所まで節がなく用材にしたらどんなに良いものが取れ

るかと思ひ、炊事用の薪にするにはあまりにもつたい無いと二人で話し合いました。

後で聞いた話ですが、木が非常に高く伸びており、先端までほとんど枝がないので、伐り倒すとき、油断すると木がくるりと回つて倒れ、その下敷きになつて死んだ者が何人もいたということでした。

シベリアでは、このような立派な立木が、次々と伐り倒されていったが、汽車に乗つて眺めたとき、野を越え、山をめぐるつてもなお林が果てしなく続いているのには驚いた。それほどシベリアの大地は広く未開のまま残されているように思われます。

晩秋ともなると、これら落葉松は一斉に黄色となる、それが延々と連なり、野や丘の果てまで一色となる雄景には、島国育ちの私たちは、悠久の姿そのままの雄大さ、自然の優雅さに打たれて、しばしの間見惚れていたものでした。

#### 〔戦友相馬君のこと〕

ある朝、風邪気味なので作業を休ませてほしい、と申し出た兵士がいた。彼は秋田県出身の相馬という中

年の兵士だった。夕方、私たちが収容所に帰つて、相馬君の顔を見て驚いた。顔が變形し、両眼が開けられないくらいはれ上がつて、人間の顔でないような痛々しい姿でした。本人に何があつたのかといくら尋ねても口を利かないので、私は仕方なく隣の大野君（彼も秋田県人だったので）に聞いてみた。大野君は、あたりをはばかるように小さい声で、

「相馬君が自分の腕時計と大きな黒パン一個と交換したのが見つかったらしい、このため下士官だった班長が、相馬君をひどく咎め、お前一人の勝手な行動で、全員の食事が減らされてもよいのか……と叱り飛ばしたあげく、こんなに腫れ上がるほど、手荒く殴つたらしい」

と話してくれました。

同じ日本人がお互い助け合つて一日も早く帰国したい気持ちでいるとき、班長の怒るのも当然と思つた。

しかし、顔が變形するほど殴打するということのも行き過ぎではないか、もつとおだやかに注意する方法がなかったかと思ひました。

やがて夕食後、班長は全員を集めて今日の出来事について詳しく説明した。

「お前たちがひもじくて我慢できず、持ち物とパンを交換する気持ちはよくわかる。しかし、ソ連側から員数によつて食糧の量が決まっている以上、一人でも無理をすると全員に迷惑が降りかかる。今後はどんなことがあつても、絶対にしないよう注意してほしい」と話された。

実は私も、以前腕時計を黒パンと交換し枕元に隠しておいた。毎夜、少しづつちぎつては食べて食事量の不足を補つてきた。それだけに「よくぞ分からずにいたものだ」と改めて背筋がぞつとした。もし相馬君より先に見つかり、殴打されていたら、とうてい帰国できなかったに違いない。それにしても、逆境にあつても、なお憎しみあう日本人の心の狭さを知つて、淋しい思いをしました。相馬君は無事復員できるかどうか、最後まで私の心の中にひっかかるものがありました。

私は相馬君が気の毒になつて彼の側へ行き、  
「相馬君！我が身を大切に頑張らねばだめだぞ、く

じけて仕舞うとこんな酷寒の僻地では、すぐ凍傷になつたり、いろいろの病氣になつて帰国できなくなるではないか。私たちは不思議な縁でこうして一緒に過ごすようになった以上、一心同体になつた気持ちで励まし合つて行こうではないか……」

といったところ、彼はくぼんだ眼に涙をため、私の手をしっかりと握つてきました。何か言つたが言葉にならなかつた。

それ以後「嚴重注意人物」としてマークされ続け、常にオドオドと周囲に気配りしながら働いていたのが哀れでならず、忘れることのできない事件でありました。

### 【解 説】

— サラワツカ収容所 二年余の強制労働 —

昭和二十年八月十五日の段階で、ソ連のスターリンは北海道占領を欲していたが、米国のトルーマン大統領に激しく拒否された。そこでスターリンは、北海道占領を諦めるかわりに、日本人捕虜五十万人（実際は



六十万人以上)を急遽シベリアに送るよう極東ソ連軍に命じていた。シベリアの日本人捕虜は、実はソ連が北海道占領挫折の身代わりであった。

― 択捉島警備隊概況 ―

第八九師団司令部。混成第三旅団(独立歩兵第二二四、二九五、二九六、二九七、四一九、四二〇大隊、混成第三旅団砲兵隊、工兵隊、通信隊、兵器勤務隊)であり、師団長小川権之助中將、旅団長志波信孝少將。配属部隊、独立白包第十五大隊、独立機関銃第六大隊、野戦機関砲第六七中隊、独立野戦高射砲第二三中隊、独立速射砲第一三中隊、船舶工兵第六連隊(暁六一七四)、第五方面軍航空情報隊の一部である。

昭和二十年二月、第八十九師団が編成完結時、第五方面軍(北東方面軍)から受けた任務の概要は次の如くであった。

「主力ヲモツテ択捉島岸冠湾(大東亞戰勃発前、連合艦隊が集結待機した湾)付近、有力ナル一部ヲモツテ同島東部トウ口付近オヨビ色丹島各要域ヲ確保シ、

敵ノ港湾、飛行場等ノ使用企図ヲ挫折セシム。ナオ国後島ハ一部ヲモツテコレヲ守備スル」

任務の重点は、前川氏勤務の択捉島であった。

作戦の方針の骨子の主たるものは、

1、港湾、飛行場、同適地を確保し、敵上陸並びに利用企図を撃破、やむを得ぬ場合においても努めて長期にわたりその利用を妨害する。

2、戦闘指導は水際における抵抗を依然重視するが、戦力の重点は内陸に保持し、強靱執拗なる戦闘遂行により敵の人的戦力の消耗を図る。

3、飛行隊、海軍と緊密な協力に努める。

4、築城―重要火器、指揮所は概成したが他は未完、未着手。

5、補給は主として機帆船、小型漁船。

6、兵器弾薬その他の作戦資材は概ね整備されたが対戦車砲弾は著しく不足。戦車肉薄攻撃用資材は相当準備しあり。

7、糧食は約一年半分集積。

要は敵の上陸はある程度覚悟の上の方針である。島

嶼に敵が集中攻撃し、各個撃破を図られるのは戦略、戦術上計算の中に入れてあるのは当然である。南方諸島においても、アリユウシヤンにおいて鳥嶼部隊の多くは玉碎していた。

#### —終戦時の択捉島の状況—

中、南千島方面兵団はソ連の攻撃を受けることなく終戦を迎え、択捉島の第八十九師団主力は八月二十九日、武器をソ連軍に引き渡した。武装解除はソ連軍の命令により逐次各地に集結収容され、全くソ連の管理下におかれた。一般邦人は逮捕されなかったが、樺太庁等の官吏、警察官、重要な職域の幹部等も逐次逮捕され、更に択捉島においては武装解除、及び移動時、目ばしい私物（時計、万年筆等）はほとんどソ連軍に掠奪されたという。

## 水漬く屍

### —日本海漂流五昼夜—

京都府 増田 豊太郎

#### 軍隊手帳戦歴の一節

昭和二十年三月一日、長崎着、勝邦丸（油送船一万噸十ノット）乗船、同十二日長崎出港、同十七日宇品港着、勝邦丸下船、宇品に在りて待機、同十九日対空戦闘に参加（広島、宇品の空襲）、同二十四日牡鹿山丸乗船、同二十六日門司着、同二十七日対空戦闘に参加、同日出港四月三日羅津着、同月十四日、伏木港着、爾来内地北朝鮮間の船舶輸送掩護に従事す。六月十三日佐渡ヶ島沖に於いて対潜戦闘に参加遭難す。”

この軍隊手帳の中に四枚に破れた補充兵証書がはさまっていて、この余白には、薄くにじんで読み取りにくい小さなペン字がぎっしりと詰まっている。本体験記は、今なめてみるとかすかに塩の味がする軍隊手帳、